九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「近藤文庫」について ： 九州大学所蔵儒学者関係諸文庫と崎門写本

柴田, 篤
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 ： 教授 ： 中国哲学史

https://hdl.handle.net/2324/13293

出版情報：貴重文物講習会. 17, 2009-02-13. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

2009年2月13日（金）

九州大学附属図書館　貴重文物講習会（平成20年度 第11回）資料

「近藤文庫」について

―九州大学所蔵儒学者関係諸文庫と崎門写本―

文学部　柴　田　　篤

一．近世儒学関係書籍と九州大学附属図書館

1，九州大学儒学関係特殊文庫

（1）「碩水文庫」（中央館保存書庫）1933、『碩水文庫目録』（1934）
（2）「近藤文庫」（中央館保存書庫、混排）1934
（3）「武内文庫」（文学部書庫、混排）1955、文学部図書室分類カード「武内文庫」
（4）「坐春風文庫」（文学部書庫）1960、『坐春風文庫 目録 及び注』（1969）
（5）「益田（古峯）文庫」（教養部分館、混排）1966、『益田文庫分類目録』（手書）
（6）「崎門文庫」（文学部書庫）1981、『崎門文庫目録』（手書、1985）
（7）「高瀬文庫」（文学部書庫、現中央館）1983、『高瀬文庫目録』（手書、1985）
（8）「吉村文庫」（文学部貴重書庫）1985、『吉村家文庫目録』（1986）

2，楠本正継教授（1896～1963）

明治29年12月	（1896）	長崎県東彼杵郡崎針尾村（現佐世保市）に出生（29日）
大正 4年 3月	（1915）	長崎県立平戸中学猶興館卒業
8年 7月	（1919）	第五高等学校卒業
11年 3月	（1922）	東京帝国大学文学部支那哲学科卒業
12年 4月	（1923）	浦和高等学校教授
15年 10月	（1926）	九州帝国大学法文学部助教授
昭和 2年 5月	（1927）	九州帝国大学法文学部支那哲学史講座教授
3年 3月	（1928）	哲学及び支那哲学史研究のため独・英・中に留学（満２年間）
9年 4月	（1934）	文科研究室主任（２年間）
17年 6月	（1942）	文学博士（東京大学）の学位を授与
19年 5月	（1944）	九州帝国大学附属図書館長（第11代、２年間）
24年 4月	（1949）	九州大学評議員（２年間）
28年 4月	（1953）	九州大学文学部教授、大学院文学研究科指導教官
29年 4月	（1954）	文部省科学研究費による総合研究「九州儒学思想の研究」開始
31年 10月	（1956）	ロックフェラー財団研究助成費による「宋明思想の研究」開始
35年 3月	（1960）	九州大学定年退官
35年 6月	（1960）	九州大学名誉教授
37年 11月	（1962）	『宋明時代儒学思想の研究』を廣池学園出版部より出版
38年 11月	（1963）	『宋明時代儒学思想の研究』により西日本文化賞受賞
38年 12月	（1963）	福岡市の自宅において逝去（23日）享年66
39年 1月	（1964）	『宋明時代儒学思想の研究』により朝日文化賞受賞

3，楠本家三代と旧蔵書

楠本端山（1828 ～ 1883）　名は後覚、「楠本文庫」（長崎図書館）

楠本碩水（1832 ～ 1916）　名は孚嘉、「碩水文庫」（九州大学）

楠本海山（1873 ～ 1921）　名は正翼、端山の長子、「楠本文庫」（長崎図書館）

楠本正継（1896 ～ 1963）　号は剛堂、海山の長子、「楠本文庫」（國士舘大學）

（1）「碩水文庫」（九州大学附属図書館中央図書館）1933 年（昭和８）購入

『碩水文庫目録』（1934）

（2）「楠本文庫」（長崎県立長崎図書館）1975 年（昭和 39）購入

『長崎県立長崎図書館古典籍目録』（2008）

（3）「楠本文庫」（國士舘大學附属図書館）1965 年（昭和 40）寄贈

『楠本文庫漢籍目録』（1973）

二．崎門写本について

1，山崎闇斎と崎門三傑

山崎闇斎（1618 ～ 1682）

佐藤直方（1650 ～ 1719）、浅見絅斎（1652 ～ 1711）、三宅尚斎（1662 ～ 1741）

2，崎門文献

（1）『日本道学淵源録』大塚観瀾編、楠本碩水増補、1900 序、1934 刊

（2）『崎門学脈系譜』楠本碩水編、1891 序、1940 刊

（3）『大倉精神文化研究所所蔵 崎門学派著作文献解題』（『阿部隆一遺稿集』第三巻）

3，「近藤文庫」収蔵写本

①『易学啓蒙先天図説』１冊（月田蒙斎撰）（123/エ/21）

②『海気深処詩藁』１冊（月田蒙斎撰）（564/カ/21）

③『延平答問』２冊（朱熹編、正保３年刊、「敬甫」印、中村之欽旧蔵）（123/エ/23）

④『論愛之理之説』（高階有則撰）（123/ロ/39）

『論宇井弘篤愛之理説』（碩水文庫/ロ/16、貴重書庫）

【楠門学参考文献】

（1）柴田篤「貞方弥三郎と柳浦文集」（『中国哲学論集』第 11 号、1985）

（2）柴田篤「『鳶魚斎詩文』—明治の儒学者楠本海山の詩稿と文稿—」（『九州中国学会報』33 号、1995）

（3）柴田篤「楠本海山覚書—ある崎門学者の生涯と著述—」（『香椎潟』49 号、2003）

（4）柴田篤「文学部所蔵「武内文庫」の謎を追って—楠本正継図書館長とその時代—」（「図書館情報」210 号、2005）

（5）柴田篤「楠本家三代の家学と退渓学」（『中国哲学論集』第 31・32 合併号、2006）

（6）柴田篤「碩水文庫余滴—楠本正継教授と九州大学附属図書館—」（『中国哲学論集』第 33 号、2007）

（7）柴田篤「楠本正継博士覚書」（『名古屋大学中国哲学論集』第６号、2007）

（8）柴田篤「益田古峯小伝—九州大学「益田文庫」の旧蔵者—」（『中国哲学論集』第 34 号、2008）

出典: 阿部隆一「大倉精神文化研究所所蔵崎門学派著作文献解題」(『阿部隆一遺稿集』第3巻,汲古書院,1985)

大倉精神文化研究所所蔵

崎門学派著作文献解題

はしがき

崎門学派に関する研究は従来必ずしも乏しいとは言へぬ。併しその大部分は極めて限られた資料に頼ってゐる。従って同学派の全貌を根本から尽し得ぬことは言ふまでもない。それには理由があった。崎門学派は師弟の間の講義口授を重んじ、その講述の筆録を極めて丹念に行ふ伝統があった。梓に上すのは大ていはその講義の際のテキストとして使用する教科書であって、その詳細な考説は講述の間に下された。宋学の風にならって「朱子語類」の様な語類に重きを置き、所謂ゾ式の独得なスタイルを伝襲してゐる。かうした類のうち、重要なものでも版になったものは稀れで、大部分は写本で通行してゐる。口述を弟子が筆録したものを師が校閲して加筆訂正した言はば証本と言ふべきものがある。従ってこの学派の研究は、刊本にのみ頼るとするならば、極めて不十分であることは自明である。

明治後新に活字に翻印されたものは江戸期の板本の極く一部である。写本のうち翻刻されたものに至っては更に寥寥たるものである。有名な浅見絅斎を例にとって見ても、未だに全集は刊行されてゐない。明治後の翻刻も「靖献遺言」の様なある一部のものは度々版種を重ねたが、他は顧みられない。絅斎の生々とした真面目を発揮してゐる重要な講義筆記や論説は依然として未刊のまゝである。同著作のうち、いかに板本、活版本が少いかは後に記すこの目録を見ただけでも容易にわかり、且つ一驚するであらう。

深くこの方面の研究調査にふみ入らうとする者が、先づ当惑するのは文献である。写本であるから、今となっては何処にでもあるといふわけにいかない。即座に手に入らぬ。また何処かで幸に入手したとしても、写本であるから魯魚の誤りは免れない。一本でよしとして安んずるわけにゆかぬ。幾本かを比較校合せねば十分ではない。先づその本が何処に蔵されてゐるか、その所在を探さねばならぬ。次にその本の系統と性格の書誌学上の検討を下さねばならぬ。残念ながら現在の学界の情況はかゝる段階にある。

まだこの確実な基礎調査が成就してゐないのである。これは敢て崎門学派の場合に限らぬ。五十歩百歩の差違はあっても、日本思想史の分野ではまだコンパスなしに航海する様な段階であると称しても、強ち極論ではない。高遠な研究調査どころか、その前にその地盤の地ならし工作が成ってゐないのである。しっかりした地盤の上に立たぬ建築では砂上の楼閣になる。これで痛痒を感じないのは、手近な不完全な狭い資料で空論してゐる様なものである。餘程不勉強な安易な所に安んじてゐるのである。日本の学問は底が浅いと言はれても、この点では返す言葉がなからう。崎門学派の研究も、他に比して、この学派の性格上、今最初にせねばならぬのは、現存文献の書誌学上の調査、書目の作成である。各地各文庫の架蔵本の所在とその書誌が明かになり、次いでそれ等を相互に比較校合すれば、始めてよいテキストが作成できる。従来は折角犠牲を払って刊行されても、校合が不十分なために学術上使用に耐えないものがあった。これ程の浪費はない。現今の出版界ではかうした過去の先哲著作の翻印が極めて成就し難い情勢にある。従って当分刊行は理想であって、仮令その目標に達せずとも、書目が完備してをれば、一応研究者の要望に応ずることはできる。緊急になさねばならぬことは書目の編纂である。此は一人ではできぬ。広く全国の同学者の協力共同作業を俟たなくては不可能である。この縁の下の力持、地味な作業をもって研究者は相互に公平な地盤から出発できる。

①『通書筆記』（近藤畏斎旧蔵、「畏斎蔵書」、121/ツ/1）

誠下第二　此章論聖人全此實理而五常百行本乎此矣而及學者思藏之功

朱子曰、上章言大極陰陽五行、下章言

誠下第二　此章論聖人全此實理而五常百行本乎此矣而及學者思藏之功

朱子曰上章言太極陰陽五行下章言太極之在人者也又曰上章言聖人之誠而天道之誠下章言思誠者人之道也　性理大全

③『通書解筆記』（楠本碩水旧蔵、「碩水蔵書」、碩水文庫/ツ/5）

收按今注藏字恐誠字誤

誠下第二　此章論聖人全此實理而五常百行本乎此矣而及學者思藏之功

朱子曰上章言太極陰陽五行下章言太極

②『通書解筆記』（近藤思斎旧蔵、「収按」、121/ツ/2）

①『通書筆記』（近藤畏斎旧蔵、「畏斎蔵書」、121/ツ/1）

動一靜之間、体五用行、莫非太極全体之妙矣、如苗說所言、則似太極在一隅也、此所以至之疑問而朱子改之矣、

辛亥八月十六日識

「新苗二說異同、辛亥八月十六日所識、恐為得之、但其說有未猶者耳、今按朱子苗說亦豈有大差謬者哉、說去說来、既無太極在一隅之弊也、然已曰自五而一以推到一太極、又曰自五而萬、則其以不推之曰自一而萬、其五以下、似止為五行之用、太極反不與焉、至之疑如此、則常太極在貞上、不似曰元亨誠之通、利貞誠之復、朱子以為然、改之、新注已曰以神妙萬物之体而言、至四時運行万物終始、則引無極二五妙合之語、又曰以神妙萬物之用而言、尤足以見太極体五用行、無適非太極之妙矣、太極不在一隅之意、甚明白、

五行陰陽陰陽太極、図說所謂五行一陰陽、

②『通書解筆記』（近藤思斎旧蔵、「収按」、121/ツ/2）

樂物對以說神

樂記第十七

八音以宣八方之風見国語　按国語周語樂記曰八風從律而不姦　注八風從律應節至也　疏八風八方之風也律謂十二月之律也樂音象八風其樂得其次故八風十二月律應八節而至不為姦慝也八風者白虎通云距冬至四十五日條風至條者生也四十五日明庶風至明庶者迎衆也四十五日清明風至清明者芒也云云史記律書云律曆之所以還五行八正之

③『通書解筆記』（楠本碩水旧蔵、「碩水蔵書」、碩水文庫/ツ/5）

陰陽太極、主意有必異、後上文言生之叙、故說五行陰陽、太極只是一而不相離也、此則逆推上指其本体而示之、以小圖爾言之、則猶自春至、推原之至冬、是靜也、太極之体所立也、此時萬物統体一太極、所謂混也、四時運行萬物終始、猶言自冬推而之至春、是動也、太極之用所行也、此時太極散殊萬物、所謂闢也、五而二、而一、陰之闔也、靜也、太極之体立五而万、陽之闢也、動也、太極之用行、一動一靜、相推行而變化無窮也、水之陰火之陽、是物之不相通者、莫甚焉、而其相根者、乃是理、所謂神之妙也、下文承此水火以五行說起、語類方子録、分為兩截者、其分畫恐異於解意、

右嘉保元年癸丑十二月十一日識、

太極只是動靜之理也、陽之時太極在陰、而動之靜之理亦在于此、陰之時太極在陽、而動之理亦在于此、是何故耶、理無方体、雖有動有靜、亦是一理而已、陽之時則特陽之理為主、其本是一理故靜之理亦不離焉、雖有大小也、所謂理無大小、

30. 6. 20
220996

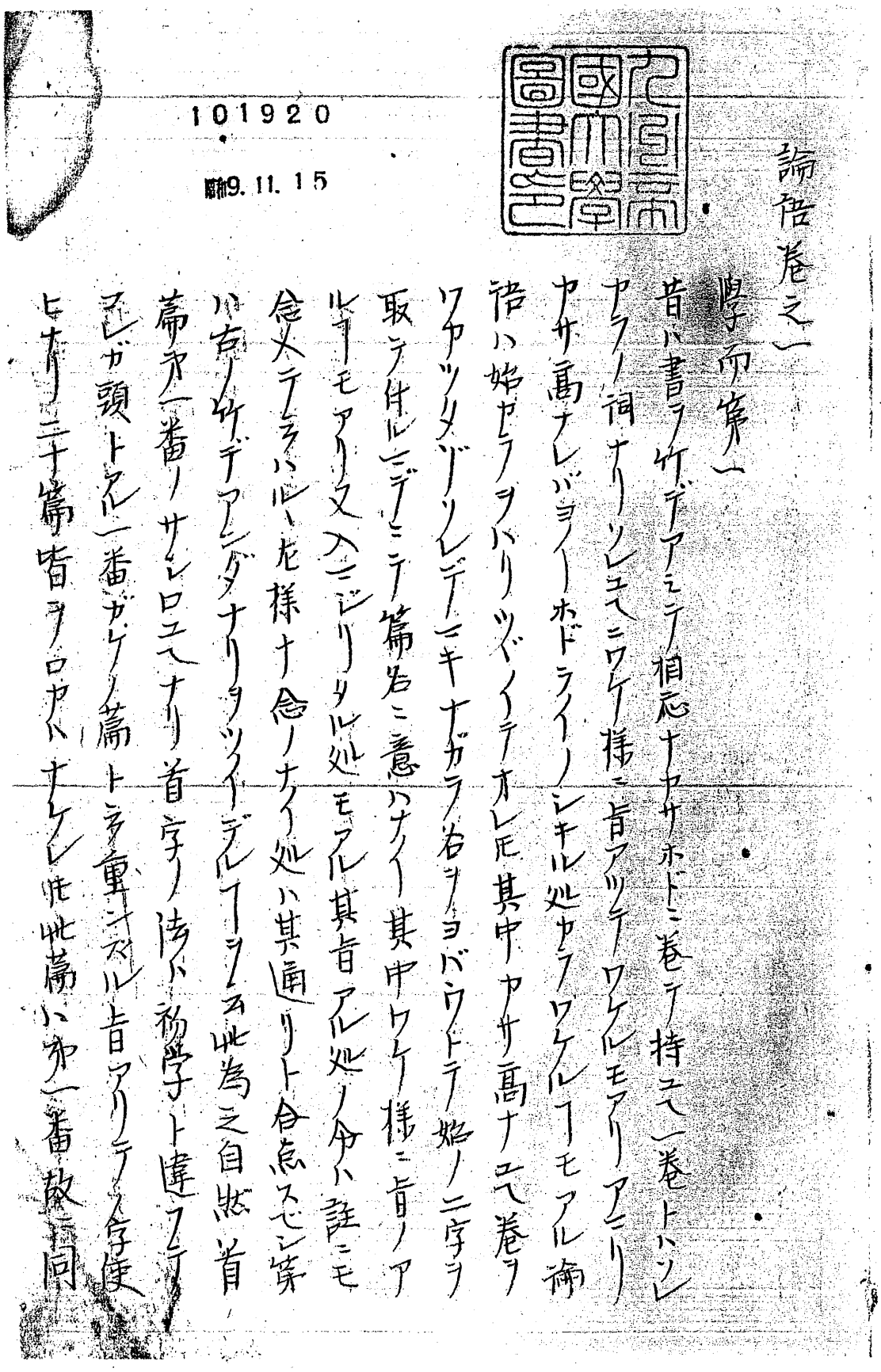
論語卷之一

學而篇一

昔ハ書ヲ竹デアミテ相應ノカサホドニ卷デ特ニ一卷トスハソレカラノ詞ナリソレ故ワケ様ニ旨有テワケルモアリアニリニカサ高ナレバヨイホトライノトキル所カラワケルモアル論語ハ始ヨリ終ツヾイテラレに其内カサ高ナニ卷ヲワカツメブソレデ卷ナガラノ名ヲヨバウトテ始ノ二字ヲ取テ付ルニデニテ篇名ニ意ハナイ其内ワケ様ニ旨ノアルモアリ又入ニドツメル所モアル其旨アル所ノ分ハ詩ニモ念入テ云ハルヽ左様ナ念ノナイ処ハ其通ト合点スベシ篇ハ古ノ竹デアニダナリラツイテルモラ云此為書之首篇ハ第一番ナリシロニヘナリ首ノ字ノ字法ハ初ノ字ト違テコレガ頭トスル一番ガケノ篇トスラモンズル旨有テノ字使ナリ二十篇皆ヲ口カハナケレに此篇第一番故故ニ同ニ聖言ト云テモ本ヲ弱ノ意多イヲ何事デモ天下人

武内謙治

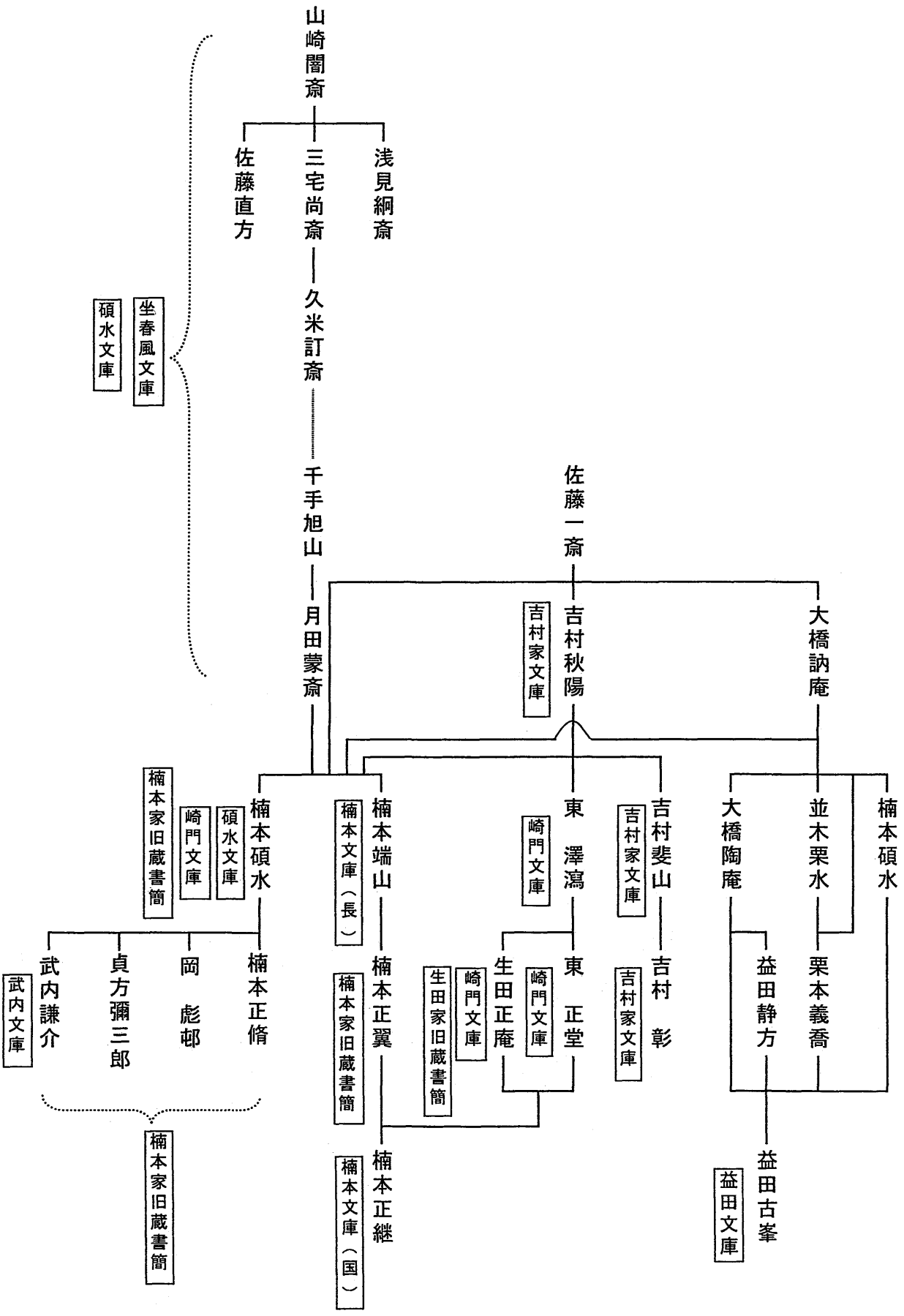
⑤『論語師説』（近藤畏斎旧蔵、中央館「近藤文庫」、123/ロ/25）



101920
昭和9. 11. 15

論語卷之一

學而第一

昔ハ書ノ竹デアニテ相応ナヤサホドニ卷テ持ニ一卷トハソレヤノ向ナリソレニ一ツヲ様ニ旨アツテ一ツヲケルモアリアニリヤサ高ナレバヨノーホドライノシキル処ヤフツヲケルモアル論語ハ始ヤフヲハリツヾイテオレ尼其中ヤサ高ナニ卷ヲワヤツメゾソレデ一キナガラ名ヲヨバウトテ始ノ二字ヲ取テ付ルニデニテ篇名ニ意ハナイ其中ワケ様ニ旨ノアルモアリ又入ニシリタル処モアル其旨アル処ノ分ハ註ニモ念入テヲハルヽ尼様ナ念ノナイ処ハ其通リト合点スセシ筆ハ古ノ竹デアンダナリツイデルヲ此為之自然首篇ヲ一番ノサレロニ一ナリ首字ノ法ハ初学ト違フテ一ツヲ頭トアル一番ガケノ篇トヲ重ニスル旨アリテノ字使ヒナリ二十篇皆ヲロヤハナケレ此篇ハ第一番故ニ同

九州大学所蔵特殊文庫関係学統図